

原 著

リハビリテーション医療系大学生における学業および
大学生生活適応尺度の作成西田 齊 二¹⁾ 田丸 佳 希¹⁾ 宮嶋 愛 弓¹⁾ 杉原 勝 美¹⁾
川上 永 子¹⁾ 松下 太¹⁾ 銀山 章 代¹⁾ 上田 任 克¹⁾

1) 四條啜学園大学

キーワード

学業成績, 適応能力, 作業療法学生

要 旨

現在, 高等学校卒業者のおよそ 50% が大学へ進学している一方, 休学・中退者の数は増え続けており, 社会問題化している。文科省は休学・退学の要因として, 高校と大学教育のギャップが生む『学業不振』を挙げている。必ずしも学業に重きをおかない, 多様な価値観を持った学生のグローバル化が背景にある中, リハビリテーション医療系大学生は, 一方で明確に学業をクリアすることを求められるという特徴がある。本研究の目的は, リハビリテーション医療系大学生を対象にした, 学業および大学生生活適応尺度を作成することである。作業療法学教員 2 名によって精選された 35 項目に対して, 学生 122 名に反応を求めた。探索的因子分析の結果, 感情・心理因子(6 項目), 積極性因子(6 項目), 適合感因子(4 項目), 他者性因子(3 項目), 自己対処因子(3 項目)の 5 因子構造が得られた。信頼性に関しては, Cronbach α 係数は高値を示し, 因子間相関ではすべての因子間に有意な正の相関が見られ, 一定の内的整合性, 信頼性は保たれていた。

問題

大学在学者数は, 平成 23 年度で過去最高となりその後連続して減少しているものの, 約 287 万人に上る。また, 高等学校卒業者の進学先として, 専門学校進学率が 4 年連続して上昇し 17.0% に上り, 大学進学率は減少傾向にあるとはいえ, 49.9% であり全体のおよそ半数である(平成 25 年度)¹⁾。

一方で, 大学生の休学・中途退学の状況は, 社会問題としてクローズアップされている。平成 26 年 9 月発表の調査では, 中途退学者の総数は, 全学生数 299 万 1,573 人のうち 2.65% にあたる 7 万 9,311 人で, 平成 19 年度と比べ 0.24 ポイント増加した。休学者の総数は, 全体の 2.3% にあたる 6 万 7,654 人で, 平成 19 年度と比べ 0.5 ポイント増加している。

中退・休学の最も大きな要因として, 文部科学省は「経済的理由」を挙げ, 所得連動返還型奨学金の導入に向けた対応を加速すると表明している。また, 他の大きな要因として, 高校と大学における教育のギャップに学生が

適応できていないという意味で, 「学業不振」をあげており, 新入生を対象とする教育プログラムの推進を唱えている²⁾。

また, 谷島³⁾は, 学力面での適応困難とともに, 人間関係や社会生活における適応困難の問題の増加を指摘し, 前者だけでなく後者への対応も必要であるとしている。

また前述した近年の大学進学率の増加に伴い, 大学生は多様な価値観をもち大学生活に対して多様な意味づけを行っている⁴⁾ (いわゆるグローバル化)と考えられる。つまりは, 学業に大きな価値観を置かない学生も数多く存在すると考えられる。

そのような背景の中, リハビリテーション医療系大学に入学してくる学生も, 少なからずグローバル化の影響を受けていると考えられる。しかし, 一方で, リハビリテーション医療系大学生(以下リハ大学生)は資格取得という目的性が, 比較的はっきりしており, 目的に向けて, 学業としてクリアしていくことを明確に求められる。また, 高校と大学における学業内容のギャップとい

う意味でも、一般大学と比較すると大きいといえる⁵⁾。従って、医療系大学生の学業についての認識は、大学への適応という意味で、非常に重要な事柄になると考えられる。

つまりは、リハ大学生が学業およびそれに関連した大学生活を如何に認知しているかを測定する尺度の開発が必要であるといえる。

現在のところ、リハ大学生の学業およびそれに関連した尺度に関する研究は少ない。

従って本研究の目的は、リハ大学生を対象とした、学業および大学生生活適応尺度を作成、項目を選定することである。

方法

1) 本研究の手続きと被調査者

2013年～2014年の講義時間中、本学作業療法学専攻学生を対象に質問紙による調査を実施した。有効回答者は122名(女性67名、男性55名、平均年齢19.49、標準偏差0.50)を分析対象とした。

2) 質問紙

質問紙は次の手続きにより作成された。ライフスキル、アサーティブについてコンサルティングや企業内研修を展開する企業が作成した、業務に対する適応性アンケート⁶⁾をもとに、作業療法学専攻教員2名の精選により、リハ大学生を対象にした項目の選定を行い、また字句に修正を加え、仮の学業および大学生生活適応尺度を作成した(35項目)。この35項目に対し、5件法(1:そうとは思わない～5:その通り)で回答を求めた。

3) 統計処理

探索的因子分析(重み付けのない最小二乗法・Promax回転)

結果と考察

1) 因子分析による尺度項目の分析

因子分析に先立ち、35項目について探索的記述統計により得点分布を確認したところ、下記の質問項目で、得点分布の偏りが見られた。①「自分の目指す仕事は社会的に重要な仕事だと感じている。」(平均値および標準偏差: 4.50 ± 0.06)、②「勉強で困った時には相談できる人がいる」(4.09 ± 0.08)、③「休み時間や休みは多いにこしたことはないが、没頭できることを大切にしたい」(3.64 ± 0.09)

しかし、いずれの項目もその内容から、リハ大学生の学業および大学生生活の適応性について、関連の可能性がある項目と推察された。

そこでまず項目を除外せずすべての質問項目を以降の分析対象とした。(結果、①③については因子分析過程で除外された。)

重み付けのない最小二乗法により初期解を得たが、スクリープロットによる因子数の決定は困難であったため、探索的因子分析(最小二乗法・Promax回転)を繰り返した。

その課程で、因子負荷量0.35以下の項目、および複数の項目に0.35以上の因子負荷量を示した13項目を分析から除外し、再度、最小二乗法・Promax回転による因子分析を行った。結果すべての項目が0.35以上の因子負荷

| 因子名 | No. | 項目内容 | 第1因子 | 第2因子 | 第3因子 | 第4因子 | 第5因子 | 共通性 |
|-------|-----|-----------------------------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
| 感情・心理 | 18 | 勉強を通じて能力、人間的な成長の実感がある | .832 | .074 | -.138 | .161 | -.001 | .655 |
| | 21 | 勉強を通じて感動する機会がある | .746 | .007 | .029 | -.092 | -.061 | .574 |
| | 19 | 勉強、大学には自分を活気づける好ましい緊張感がある | .716 | .001 | -.093 | .118 | -.010 | .621 |
| | 20 | 不足を発見した時にはこれでまた自分が進歩できると感じる | .678 | .061 | -.031 | -.015 | .101 | .712 |
| | 22 | 勉強をやり遂げたときの達成感には変えがたい喜びがある | .591 | -.238 | .224 | .132 | -.066 | .451 |
| | 17 | 大学に尊敬している人がいる | .483 | -.113 | .186 | .223 | -.110 | .595 |
| 自発性 | 6 | 勉強や授業において自分の考えを積極的に表現できる | -.171 | .818 | .011 | .163 | -.113 | .521 |
| | 5 | 課題、目標を自分で立てることができる | .027 | .719 | -.010 | -.109 | -.087 | .527 |
| | 7 | 新しい企画・アイデアを出すことができる | -.031 | .686 | .000 | .197 | -.082 | .406 |
| | 12 | 教員や周囲の人たちから期待されているのが分かる | .045 | .460 | .213 | .094 | -.015 | .553 |
| | 9 | 勉強に必要な知識や技術を身につけている | .023 | .445 | -.070 | -.077 | .348 | .525 |
| | 8 | 学ぶことがたくさんあり、自主的に学ぶことが楽しい | .233 | .435 | .071 | -.012 | .144 | .424 |
| 適合感 | 2 | 大学での勉強は自分に合っていると思う | -.055 | .035 | .774 | -.069 | .043 | .462 |
| | 3 | 自分の考え方や望む生き方に適した勉強だ | .185 | -.128 | .695 | .053 | .055 | .752 |
| | 4 | 自分の長所が発揮できていると思う | -.137 | .191 | .681 | .287 | -.123 | .389 |
| | 1 | 大学での勉強が好きだ | .136 | .168 | .536 | -.515 | .125 | .500 |
| 他者性 | 11 | 勉強で困った時には相談できる人がいる | .092 | -.022 | .026 | .708 | .077 | .335 |
| | 10 | 大学でのコミュニケーションは良い | .187 | .193 | -.120 | .574 | .054 | .752 |
| | 16 | 同級生や周りの人から感謝されることがある | -.009 | .296 | .025 | .425 | .227 | .501 |
| 自己対処 | 14 | 感情的にならず目的を達成できる | -.157 | -.155 | .024 | .224 | .931 | .562 |
| | 13 | 教員から指示・指導がなくても勉強を進めることができる | .126 | .069 | -.082 | -.142 | .616 | .508 |
| | 15 | 他者からの批判も好意的に受け止めることができる | -.033 | -.149 | .155 | .174 | .578 | .413 |
| | | 因子寄与率 | 7.06 | 1.48 | 1.31 | 1.00 | 0.88 | 11.737 |
| | | 寄与率 | 32.08 | 6.73 | 5.98 | 4.55 | 4.02 | 53.35 |

Table 1 リハ大学生の学業および大学生生活適応尺度の項目内容と因子構造 (Promax 回転)

量を示す、22項目5因子構造を得た。

Promax 回転後の最終的な因子行列、各因子の寄与、寄与率、累積寄与率、共通性について Table 1 に、最終的なスクリープロットを Table1-2 に示す。ちなみに、5因子で22項目の全分散を説明する割合は、53.35%であった。

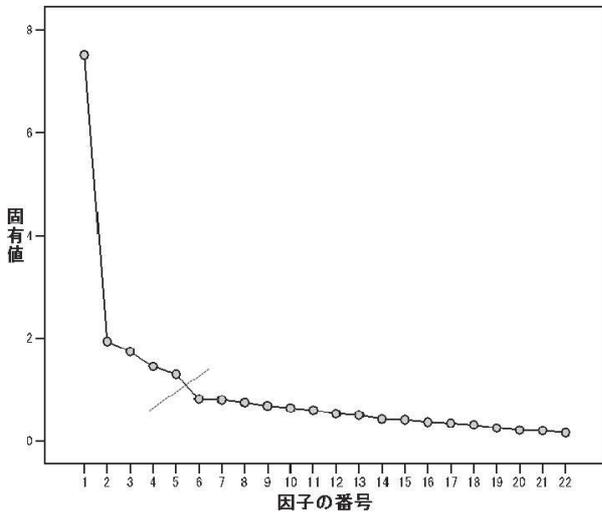


Table 1-2 因子のスクリープロット

2) 因子の命名

第1因子は、「勉強を通じて能力、人間的な成長の実感がある」「勉強を通じて感動する機会がある」など、大学での勉強の積み重ねや、環境に身をおいての、喜び・達成感・成長感を示す内容であり、『感情・心理因子』と命名した。

第2因子は、「課題、目標を自分で立てることができる」「学ぶことがたくさんあり、自主的に学ぶことが楽しい」など、学業への自主的・積極的な取り組みの度合いを示す内容であり、『積極性因子』と命名した。

第3因子は、「大学での勉強は自分に合っていると思う」「自分の長所が発揮できていると思う」など、学業および大学生活が適合しているかどうかに関する学生の感じ方の程度を示す内容であり、『適合感因子』とした。

第4因子は、「勉強で困った時には相談できる人がいる」「同級生や周りの人から感謝されることがある」など、援助者を含め、周囲との関りの程度を示す内容と考えられ『他者性因子』とした。

一方第5因子は、「感情的にならず目的を達成できる」「他者からの批判も好意的に受け止めることができる」など、セルフマネジメントを表す内容と考えられ、『自己対処因子』とした。

3) 信頼性

Cronbach の α 係数 (Table 2) は第1因子で $\alpha = .83$ 、第二因子で $\alpha = .81$ 、第3因子で $\alpha = .79$ 、第4因子で $\alpha = .76$ 、第5因子で $\alpha = .71$ であり、内の一貫性は支持されたと考えられる。

| | α 係数 |
|----------|-------------|
| 1. 感情・心理 | 0.834 |
| 2. 積極性 | 0.813 |
| 3. 適合感 | 0.792 |
| 4. 他者性 | 0.760 |
| 5. 自己対処 | 0.715 |

各因子の相関性については Table 3 に示す。5因子すべてが、有意な正の相関を示した。

「1. 感情・心理因子」は、他のすべての因子と高い相関性を示していた。その中でも特に、「2. 積極性因子 ($r = 0.736$)」および「4. 他者性因子 ($r = 0.663$)」との間で極めて高い相関を示した。積極的・自主的に学業に取り組む姿勢と、他者とのつながりを求める姿勢は、喜びや達成感などの感情・心理的要因と強く結びついている傾向を示している。以下推察であるが、学業への積極性・自主性は、学業に対する喜びや達成感を経験していることで、より生じやすいことであり、逆に言うと、それを経験する頻度の少ない学生は、きっかけが生じないと学業に対する積極性を発揮するようなサイクルに、なかなか入りにくいのではないかと。また、他者とのつながりの中で、評価されることで、喜びや達成感は増すものと考えられ、喜びや達成感が、また他者とのつながりを求めるというサイクルに結びつくのではないだろうか。その他の因子との高い相関性からも、学業への感情・心理因子は、つまりは学業に対するモチベーションという意味合いで、基礎となる因子かもしれない。

| 因子 | 1 | 2 | 3 | 4 |
|--|---------|---------|---------|---------|
| 1. 感情・心理 | | | | |
| 2. 積極性 | 0.736** | | | |
| 3. 適合感 | 0.583** | 0.597** | | |
| 4. 他者性 | 0.663** | 0.665** | 0.452** | |
| 5. 自己対処 | 0.443** | 0.410** | 0.289** | 0.390** |
| Pearson correlation coefficient ** $p < .01$ | | | | |

今後の方向性と課題

前述したように、大学入学者のグローバル化を社会的背景として、リハビリテーション医療系大学生もその流れに無縁とは考えられず、一方で目的大学として専門的な知識、技術を身に付けていくことを必要とされる。この状況において、学生の学業と大学生活適応の程度を客観的に測定する尺度の開発は、リハビリテーション医療系大学における教育に今後ますます必要であると考えられる。

尺度の信頼性については、一定の成果を得たと考えられるが、今後再検査法などを用い、質的精度を上げていくことが必要だろう。また、妥当性については、他尺度との相関分析などの手段で、検討していくことが必要となる。

リハ大学生を対象としているが、対象大学が未だ本学作業療法学生のみである。今後は、理学療法学生および、他リハビリテーション大学学生のデータも収集することが必須である。

これらは、次回の課題としたい。

引用文献

- 1) 文部科学省「平成 25 年度学校基本調査(速報値)の公表について」(平成 25 年 8 月 7 日)
- 2) 文部科学省「学生の中途退学や休学等の状況について」(平成 26 年 9 月 25 日)
- 3) 谷島弘二：大学生における大学への適応に関する検討。人間科学研究 27：19-27, 2005
- 4) 大久保智生, 青柳肇：大学生用適応感尺度の作成の試み。パーソナリティ研究 12：38-39, 2003
- 5) 仙波 浩幸, 清水和彦：理学療法専攻学生の精神的健康度。豊橋創造大学紀要 15：99-112, 2011-03
- 6) 株式会社 MART ONE(2009) モチベーション・適応アンケート (<http://www.martone.co.jp/a/questionnaire.html>) (2015 年 12 月現在)

Development of the scale of relationship between academic performance and adaptation skills in university life for the student of rehabilitation related professions

Saiji Nishida¹⁾ Yoshiki Tamaru¹⁾ Ayumi Miyajima¹⁾ Katumi Sugihara¹⁾
Eiko Kawakami¹⁾ Futoshi Matushita¹⁾ Tadayoshi Ueda¹⁾

¹⁾Shijonawate Gakuen University

Key words

academic performance, adaptation skill, OT students

Abstract

Recently about 50 percent of the new graduates from high school enroll to university. However, the number of temporary absent or drop out students from university continue to grow up, and it becomes a social issue now. Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology states that one of the factor of long term absence and dropping out from the university is poor academic performance that occurs from educational gap between high school and university. While the students with various senses of values are increasing, it's important to give fixed academic performance for the student who try to be a rehabilitation related occupation. The purpose of this study is to develop the scale of relationship between academic performance and adaptation skill in university life for the OT students of Shijonawate—gakuen University. 122 OT students were involved to answer the 35 questions which were selected by 2 OT teachers of the university. As a result of searching factor analysis, 5 factors which are consisted by feeling and psychological factor(6 items), initiative factor (6 items), feeling of conformity factor(4 items), other related factor(3 items) and self-cooping factors(3 items). The reliability by the Cronbach coefficient shows high score and meaningful equilateral correlation among the factors also shows significantly high.

